

実践研究の工夫と失敗

才田 いずみ

(東北大学大学院文学研究科)

2011年度日本語教育学会

実践研究フォーラム

パネルセッション

2011.7.31 於:横浜国立大学

日本語教育研究

- 何のために研究するのか？
 - 日本語教育の質的向上のため

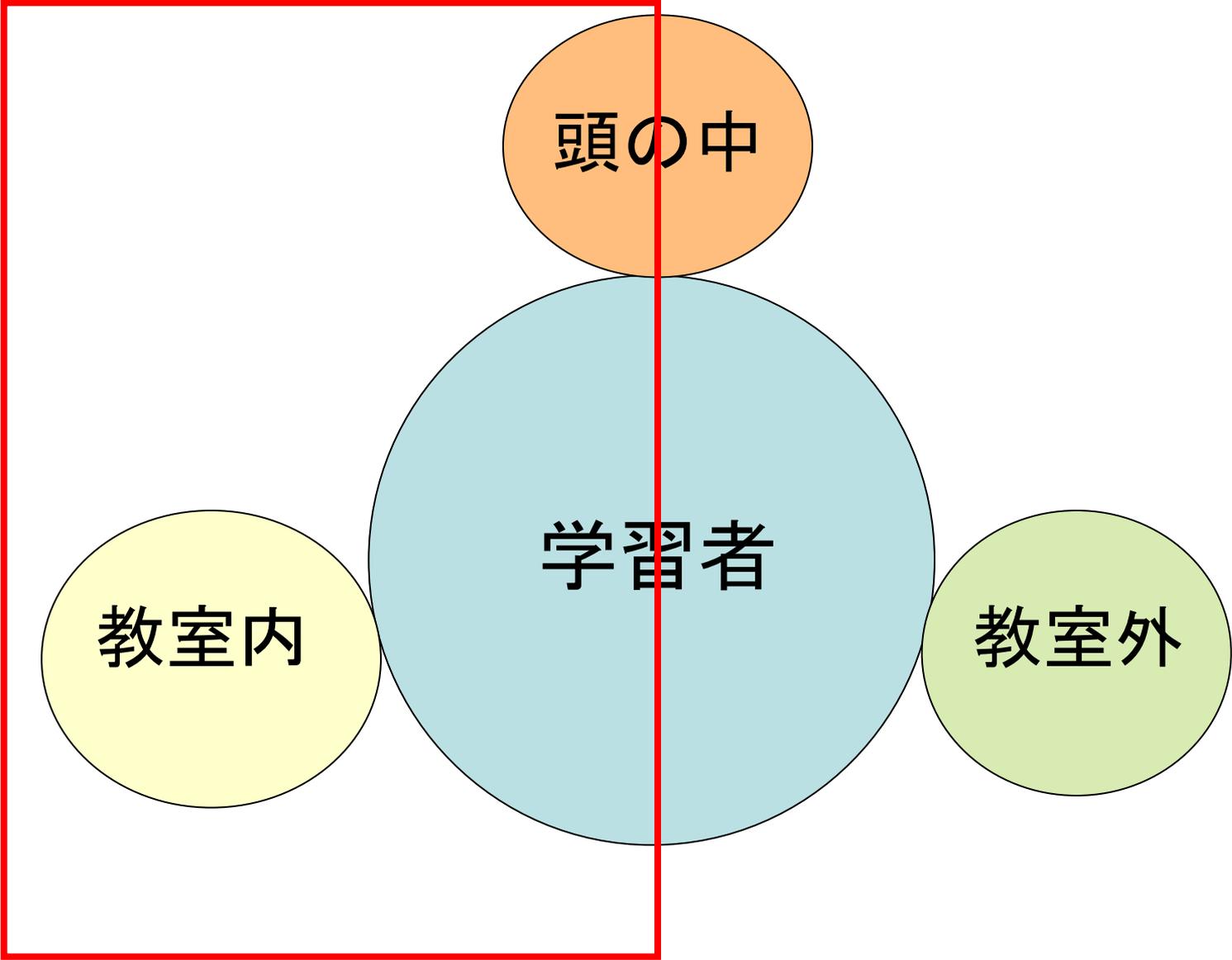
現場に還元されない研究は意味がない

- 研究対象は？
 - 現場をめぐるさまざまな要素

現場を形作る諸要素

- 学習者
- 教師
- 教材
- 教育内容
- 教授法
- 教室テクニク

.....などなど



頭の中

学習者

教室内

教室外

現場研究は全て実践研究？

- 現場に還元できる
 - 現場を進歩／進化させる
 - 「当該現場」だけではない
-
- 現場に還元できない
 - 研究としての工夫が足りない／失敗

なぜ「工夫と失敗」だったのか？

- 成功事例より失敗事例のほうが原因が探りやすい
 - 失敗のほうが改善策を考えやすい

ただし

- 単なる失敗ではだめ
- その試み自体に**説得力**が必要

説得力を持たせるには

- 実践は個々別々であっても、切り取り方によって学ぶところはある。
- 下手に一般化せずに具体的な情報提示を。

事例に見る求められる情報

- その活動をデザインした動機や理由
- 事前の状態と提示
 - どこをどう工夫して変えたかを示す
- ローカルな条件をきちんと示す
 - 学習者の人数, 時間数, 制約など

事例に見る求められる情報 2

- 「〇〇を用いた授業の試み」
「〇〇」の新奇性に頼るのでは不十分
- 活動のプロセスを分かりやすく
- フィードバックはどう行った？
- 工夫に対する評価
学習者の反応や評価は？
- 学習者のパフォーマンスの変化は？

事例に見る求められる情報 3

- 課題や問題点の把握
 - 効果を何からどう読み取るか
- 考えられる原因
- 改善の方向性

実践研究のプロセス

- 取り組みの動機（問題の所在・目的）
- それへの対応策の決定（仮説）
- 具体的なプロセス（方法）
- 変化の結果（データ）
- 評価（分析・考察）
- 現場にどう還元するか（成果と課題）